

白山ふるさと文学賞

第十四回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」または「家族へのおもい」〉

小学生5・6年の部 優秀賞

## 「家族への思い」

広陽小学校六年 伊藤睦人

ぼくは今、父・母・妹・おじいちゃん・おばあちゃんの六人で暮らしています。今年の春から父が能登に転勤となったこともあり、平日はいません。母も看護師をしていて夜勤などもあるので、おじいちゃん・おばあちゃんと過ごす時間が多いです。

今年の三月、ぼくはノロウイルスにかかりました。気持ち悪くて、吐きそうな感じがあつたけれど、吐くのが怖くてずっとがまんしていました。でも、とうとう限界が来て、吐いてしまい、今でもその時のことをはつきり覚えています。それがきっかけで、体調が悪くなるとすぐに吐いてしまうのではないかという不安を感じてしまうようになりました。少し咳が出る、鼻水が出るだけでも、怖くてごはんが食べられなくなりました。楽しいことを考えると、元気になると思つたぼくは去年の運動会の応援団が楽しかったので、今年もやってみようと応援団に立候補しました。でもまさかの多数決で応援団長に選ばれ、一気に楽しみから、チームをまとめないといけないというプレッシャーを感じるようになりました。なかなか思うように応援練習がうまくいかず、友達と言ひ合いをすることもありつらいことがたくさんありました。胃が痛くて、ごはんが食べられないこともありました。でも応援団長として、やると決めたからには「責任を持つて頑張らな」といけない。」と思ひました。本番では、応援団みんなで協力しあうことができ、優勝はできなかったけど、チーム一丸となり、運動会を終わらせることができたので、自分にとって最高の運動会であり、応援団長になって良かったなと思ひました。でも、そのあと体調がよくなることはなく、お腹が痛いことが続き、さらに食べられなくなりました。体重も減り、立っているとめまいを起こすようになりました。ぼくがどんどん弱つていくのを見た家族は、とても心配していました。学校を早退することが増え、体調が悪い時が長かったので、病院の先生とも相談し、大きい病院で検査もしました。身体の中には悪い所はなかったということがわかり、少し安心はしました。それでも

「気持ち悪い。」という思ひはなかなか消えませんでした。ぼくは、家族にたくさん迷惑をかけてしまつて、心配をさせてしまつて、みつともないと思ひました。隣で元気に笑つてゐる妹がうらやましくて、「うるさい！だまれ」と怒つてしまふこともありました。そしてそう言つてしまふ自分にまた、いらつき「ぼくなんてうまれてこなければよかった」と母に言つてしまひました。そしたら母は泣いてしまひました。おばあちゃんからは、ぼくが生まれる前に流産というつらい経験をしてゐたこと、へそのおの位置が悪く、あと少しずれていたら、ぼくもうまれてきてなかったかもしれないということを聞き、ぼくが無事に生まれてきたことをみんなで泣いて喜んでゐたと知りました。そこから、母やおばあちゃんとたくさん話をしました。そして少しでもごはんを食べることができるよう、母は消化の良いこんだてを考えしてくれました。父もまた、週末に帰つてきた時には、ぼくが笑顔になれるように、おもしろい話をたくさんしてくれました。おじいちゃん、ぼくのお腹に手を当て、マッサージをしながら、「大丈夫、大丈夫」と声をかけてくれました。母が夜勤の日には、おばあちゃんがぼくの話をたくさん聞いてくれて、寄りそつてくれました。そのおかげで、今少しづつではあるけど元氣になつてきました。

ぼくはビビリなので、きつとこれからも、体調が悪くなつたり、ストレスがかかつたりすると、不安に感じ、いろんなことをネガティブに考えてしまふと思ひます。でも、自分には不安な時に助けてくれる家族が近くにたくさんいてくれるので、これからもなんでも相談していききたいと思ひます。こないだ見た鬼滅の刃という映画で、炭次郎が、「強いものは弱いものを助け守る、そして弱いものは強くなりまた自分より弱いものを助け守る」と言つてゐました。その言葉の通り、今は家族に守られてゐるぼくだけけど、これから少しづつ強くなり、いつかぼくが家族を支えることができるようになっていききたいと思ひます。